

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 24 日現在

機関番号：64401

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2013～2014

課題番号：25884096

研究課題名(和文)モノからみる芸能文化のグローバル化 バリの仮面と楽器を事例として

研究課題名(英文)Globalization of Balinese Performing Arts and Material Culture: New Social Life of Masks and Musical Instruments Brought Abroad

研究代表者

吉田 ゆか子 (Yoshida, Yukako)

国立民族学博物館・先端人類科学研究部・機関研究員

研究者番号：00700931

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,200,000円

研究成果の概要(和文)：モノをめぐるバリの信仰や禁忌、モノの物質的特徴、そしてバリから持ち込まれたという履歴が、バリを離れた土地においても、芸能実践に影響を与える。すべてのグループが、楽器や仮面へ供物を捧げる。人々の楽器、仮面、冠に対する愛着や敬意や神聖視するような態度は、モノの取り扱い方法を規定するだけでなく、彼らの活動を精神的に支えたり、バリ文化を味わう契機となったりしている。またバリから運ばれた楽器や仮面や衣装は、上演に真正性を付与する。他方、それらのモノは当該地で変化もこうむる。例えば現地の宗教的文脈のなかで、新たに意味づけられたりする。新たな技術や伝統的な工芸技術を取り入れた創作の試みも行われている。

研究成果の概要(英文)：The performances and activities of Non-Balinese performers of Balinese dance, music or drama who perform outside of Bali are often influenced by the Balinese beliefs and taboos concerning material objects (i.e. musical instruments, masks, costumes, and headdresses) used in performances and their physical features (e.g. heaviness). They are also influenced by the fact that these objects are brought from Bali. Like Balinese, those non-Balinese performers give offerings to their musical instruments, masks, and headdresses. Their affection, respect, and deifying attitudes toward the objects define the way they treat those objects. In addition, they experience and enjoy the Balinese culture through such treatments.

On the other hand, these objects undergo both physical and non-physical changes. For example, they can have new meanings within the local religious context. Several groups have created new or modified gamelan sets using new technologies or their traditional craft techniques.

研究分野：文化人類学

キーワード：芸能 グローバル化 マテリアリティ バリ 文化人類学 仮面 楽器

1. 研究開始当初の背景

(1) いわゆる「民族芸能」「伝統芸能」は、現在、グローバルな人と情報とモノの動きの中で、世界各地へ伝わり、従来伝承されていた共同体や社会の外の人々によっても実践されている。特にバリをはじめとするインドネシアのガムラン演奏、仮面舞踊、影絵は、エキゾチックでユニークな非西洋の芸術として20世紀の早いうちから世界に注目され、今や北米、日本、欧州、オセアニアを中心に世界各地で、バリ人ではない人々によって学ばれ、上演され、楽しまれている。

(2) この民族芸能のグローバル化ともいえる現象について、先行研究は主に、芸能とアイデンティティ、エスニック文化の流行、あるいは、異文化(音楽)理解教育といった観点から論じてきた。教授法や作曲や演奏内容に焦点をあてるこれらの成果とは対照的に、本研究では、上演に使われるモノ(主に楽器と仮面)と人との関わりに目を向ける。

(3) 人類学では、人がモノを使うという一方的な関係性を前提とするのではなく、モノに人が行為や感情を引き出されるようなあり方、モノと人との相互に構成的な関係へと目を向けるようになった。この視点を芸能研究に引き付けるならば、人間中心的に語られてきた芸能世界を、モノやモノと人の相互的関わりという視点からとらえなおすことで、新たな芸能像を描くことができると考えられる。

2. 研究の目的

本研究は、世界各地で現地の芸能家によって演奏や上演に用いられるようになった、バリのガムラン楽器および仮面が、その後各地の人々とどのように関わっているのかを明らかにする。バリでは、楽器や仮面は神格(あるいはその力)を宿す存在である。これらのモノが新たな土地でどのように扱われ、またその土地のモノの配置や物質文化や音楽文化にどのように影響され、また現地の人々に

どのような働きかけをしているのかを、日本、北米、香港、ジャワ島の事例から明らかにする。また、米国や日本でみられる、自作のガムラン楽器や仮面の利用実態も明らかにし、これらのモノが、現地のバリ芸能実践にいかなる影響を与えるのかも考察する。民族芸能のグローバル化という現象を、モノの側から考察し、音や舞踊や演劇だけでなく、それを支える物質文化をも含みこんだ「芸能文化」の越境の問題として問い直す。

3. 研究の方法

(1) 本研究は、文献調査および現地調査から構成される。大きなリサーチクエストは、バリ島外におけるバリ芸能活動では、仮面や楽器をめぐる実践は、バリ本土と比べてどのような違いや共通点が見られるか、また違いが見られる場合、それはどのような理由によってであり、現地の物質文化(モノの配置やモノに対する思想や信仰を含む)や音楽文化がどのように関係しているのか、そしてそれらの楽器や仮面は、所有者や実践者の生活や芸能活動にどのような影響を与えているのか、の3点である。それぞれのチームが所有する楽器や仮面の「伝記」(cf Kopytoff 1986)を明らかにしたうえで考察する。

(2) 研究対象は、実践者人口の多い日本、米国に加え、これまでバリ芸能研究の中で言及されてこなかった香港およびジャワ島とする。

(3) それぞれの地の代表的な芸能団を訪れ、練習や本番を調査する。各グループのリーダーあるいは主要メンバーに対してのインタビューを行う。また、実際の上演やその舞台裏を観察しながら、(言説のレベルだけでなく)行動のレベルでの、モノと演(奏)者との関わり合いを追う。

(4) 毎年6月~7月に行われるバリ芸術祭はバリ内外の芸能家たちが上演を行い交流

する機会となっている。この祭りや関連イベントを訪れ、主に外国人による上演を観察・記録するとともに、海外でバリ芸能を教えるバリ人指導者からの情報収集の機会とする。

4. 研究成果

(1) どの地域においても、程度の差こそあるものの、モノにまつわるバリの側の信仰や禁忌、モノの物質的特徴(大きさや重さ)そしてバリから持ち込まれたという履歴が、バリを離れた土地においても、様々な芸能実践に影響を与えている。

調査対象とした全てのグループにおいて、楽器や仮面は供物を捧げられ、敬意をもって扱われていた。典型的には、メンバーの一人が、本番前に果物や花を捧げ、香をたき、祈るというものである。バリから持ち帰った聖水を用いる場合もある。また練習時や日常のささやかな祝い事の日などにも供物を捧げるグループもある。楽器をまたいではいけないという禁忌も全てのグループに共通して遵守されていた。

これらの態度の中には、バリの信仰や文化へ敬意を払うという意味合いがある。それに加えてさらに、楽器や仮面にある種の超自然的な力や性質を見出している場合もある。仮面や楽器が自分達の活動を見守るご神体としてのニュアンスをうっすらと纏っているケースもある。少なくとも供物のやり取りも含め、グループ内ではそういった態度や感覚が否定されない。むしろバリ文化のエッセンスとして楽しまれ味わわれているという面があり、公演やワークショップなどの機会に、一般の参加者にも紹介されることがある。米国のグループの1つは、祭壇を設けそこに各種の仮面を置き、バリ人の手もかりながら祀っている。ここでは上演前などには無事を祈願して供物が捧げられている。

バリ芸能活動に必要な楽器、そして一

部の仮面は、大きさも重量もあることから、ある程度継続して保管できるような活動拠点が必要となる。バリやジャカルタでは上演先の土地にある楽器や仮面を使えるということもあるが、インドネシア国外ではそういった事が期待できない。そのため大抵、自分達の楽器やその他のモノを上演先まで運搬しなければならず、上演のたびに運送の費用と労力が必要となる。これは各グループにとり、引き受けなければならない重要な困難であるが、毎回の持ち運びの作業はメンバーの献身が具体的に可視化される機会ともなる。楽器や仮面に関する禁忌や取り扱い方を共有しながら、それらのモノを運ぶという作業を分かち合うことで、グループの形が経ち現れるという面がある。芸能の上演には参加しないものの、こういった作業に精通し、繰り返しサポートするような人員(例えば上演者の家族や知人、なじみの運送業者など)を有しているグループもある。これらの人々はメンバーではないが、芸能活動を支える重要な存在として認識されている。

日本人や米国人がバリ芸能を、日本人や米国人に向けて上演するとき、彼らは多かれ少なかれ自分達の舞や演奏によって「他者の文化」を代表するという立場にたつ。このとき、その音や舞は日本やアメリカ人の身体を経由して立ち現れるのであるが、そこで用いられている楽器、仮面、衣装、冠といったモノは、バリ人によって造られバリから運ばれたものである。こうしたモノがもつ履歴はある種の真正性をパフォーマンスに付与している。上演者たちは、これらのモノを舞台に上げることで、観客に直接的にバリに触れることができる回路を提供できる。

(2) このように、バリから運ばれたモノは、バリの外で芸能を実践する人々やその上演に多様な影響を及ぼすが、他方で、現地で形を変えたり新たに意味づけられたり

もしている。

重量のある楽器の移動の負担は、楽器の改良や創作の動機の一つとなっており、軽く持ち運びやすい楽器が考案されたりもしている。また、日本のグループでは日本の工芸の技術を取り入れながらオリジナリティのある装飾を施すといったこともされている。米国では電子ガムラン楽器が考案されている。スマートフォンやタブレット端末上で音を出すことができるガムラン演奏アプリも誕生した。今のところ、ガムラン演奏者の間でそれほど目立った利用の例はないが、香港のグループのメンバーの数人が曲の練習に活用しているという。

日本では、仏教や神道に基づく慣習行為とゆるやかに結びつく傾向がみられる。特に、神社や寺での上演が活発かつ定期的に行われている。神社や寺の側、そして出演者の側もその上演を奉納と呼ぶことが多く、神々に向けた行為との意味合いをも纏っている点が特徴的である。その中では、神社の神主によって仮面や冠がお祓いをうけたりする。また、パロンの仮面が日本の獅子舞に倣って「お頭」と呼ばれるようになりしている。

ジャカルタでは、参加者のほとんどがムスリムであるため、指導者であるバリ人側も、特に芸能やそれにまつわるモノの宗教性や神聖性をあまり強調しないという傾向も見られた。また特に冠に関しては、バリ人であっても、バリ島内の芸能家と比較して、供物や儀礼を施す積極的な行動があまりみられない。衣装では、ムスリム女性の肌の露出を減すために、Tシャツと組み合わせるなどの工夫も行われている。

(3) これらのモノを巡る実践は、バリ外で活動する日本人や米国人といった外国人だけでなく、それらの土地とバリを行き来するバリ人との関わりのなかで決定され交

渉されていることも明らかになった。バリでは、Desa Kala Patra (場所、時間、状況)によって慣習や規範は変化する、という考え方がある。現地の状況に即した土地における柔軟な変更は、むしろ非常にバリの的な芸能実践の在り方だともいえる。

今後はモノと人の両方の越境を視野に入れながら、さらに得られたデータを整理分析することが課題となる。1年半の研究期間内には、世界で実践されるバリ芸能の実態について貴重なデータが多く集まった。今後も研究を積み重ねることで、バリ芸能研究を超えて、より広く芸能文化の越境をめぐる研究に対して、モノと人の関わりに着目するという新たな研究視座の有効性を示してゆけると考えられる。

<引用文献>

Kopytoff, Igor. 1986 “The cultural biography of things: commoditization as process” A. Appadurai ed. *The Social Life of Things*. Cambridge University Press, pp.64-92.

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

{学会発表}(計3件)

Yukako Yoshida “Globalization of performing arts and its materiality: how Japanese performers treat Balinese gamelan instruments and masks”, 43rd International Council for Traditional Music World Conference, 2015年7月17日、カザフ国立芸術大学、アスタナ(カザフスタン共和国)

Yukako Yoshida “How replicated masks work in Balinese society: the case of *topeng legong*”, International Council for Traditional Music, Study Group on Performing Arts of Southeast Asia, 2014年6月13日、インドネシア国立芸術大学、デン

パサール (インドネシア共和国)

Yukako Yoshida “How masks made for tourist dhow work in Balinese society: rethinking Balinese cultural tourism”, International Union of Anthropological and Ethnological Science Inter-Congress 2014、2014年5月17日、幕張メッセ国際会議場(東京都)

[その他]

ホームページ等

[講演] Yukako Yoshida 2015 Human and non-human agents in Topeng dance drama in Bali アジア・アフリカの文化と社会に関する東京外国語大学—マレーシア・サバ大学の交換講演会 2015年3月23日

[プロシーディング] Yukako Yoshida 2015 How replicated masks work in Balinese society: the case of topeng legong. in Mohd. Anis Md. Nor ed. *Proceedings of the 3rd Symposium of the ICTM Study Group on Performing Arts of Southeast Asia*.

[エッセイ] 吉田ゆか子 2014 「文化遺産は誰のもの? - 越境する人形劇ワヤン」『月刊みんぱく』2014年7月号、pp. 14-15 (査読無)

6 . 研究組織

(1) 研究代表者

吉田 ゆか子 (YOSHIDA, Yukako)

国立民族学博物館 先端人類科学研究部
機関研究員

研究者番号 : 00700931

(2) 研究分担者

()

研究者番号 :

(3) 連携研究者

()

研究者番号 :